

郷土の地名と神社めぐり

日本先史古代研究会 会員 井上秀男

一、苗字 氏 名字 姓の語源について

私は苗字(みょうじ)姓氏、地名の起こり由来について調べたりする事に興味を持っている。苗字の語源は稲の苗が分かれて増殖するように子孫も分家から更に分家が繁栄するような意味を含んで名づけられたとも言われている。名字(みょうじ)は天平 15 年(743)開拓地の私有が認められたところから、平安時代より開拓者や土地支配者が土地の領有を宣言する意味も含め、地名を家名としたことに由来するとされ、反対に家名を地名とする場合もあり地名と家名のどちらが先なのかといった点も考えられるが、その土地の在名をもって名字姓氏とする場合が多いように思う。

氏(うじ)は血縁もしくは職業を同じくする人達によって構成された部族(集団)の公称で、その村や地域の首長(氏の上＝うじのかみ)を神格化したのが氏神で俗に村の氏神様と呼ばれている。姓は「しょう・かばね・せい」と色々に呼ばれていますが、カブネ(頭根)カブナ(株名)また、骨を意味する(カバネ)等の語源から後に家格を表わす姓(せい)と呼ばれるように変化していったのだろう。苗字とその発祥地、地名との関連性等を調査研究しているといろいろなことが知ることができて歴史が楽しくなってきます。

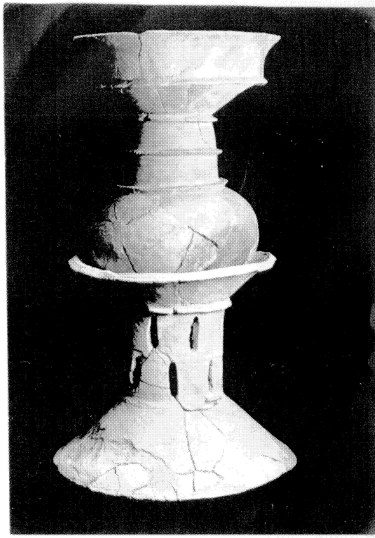
苗字や姓氏を調査する場合の文献資料として姓氏研究や系図等の分野では、古代の氏族能持続を調べるには新撰姓氏録があり古代から弘仁年間(810～823)までの諸氏 1182 氏を分類し地域ごとに整理した文献、尊卑文脈(5 巻)室町初期の系図集大成で帝王から諸家の系譜まで氏族発生研究資料として必要な文献です。他には姓氏家系大辞典(全三巻)太田亮著 昭和 49 年発刊 角川書店出版 この本は図書館等でも見られます。寛政重修諸家譜(22 巻)その他色々な諸本が出版されています。

地名の文献では古い時代では「和名抄」(わみょうしょう)は源順が承平年間(931～8)に編纂された日本で最古の辞書である。大日本地名辞典(吉田東伍著)全八巻明治 33 年 2 月初版、その他全国地名辞典等が出版されています。各県下の郡誌等大字・小字史もあります。

二、ふるさとの地名と史跡

岡山市から県道美作線を湯郷方面に車で走って 30 分で赤磐市山陽町下市地区そこから赤坂地区を通って仁堀地区から登り坂を上った所に菊ヶ峠ドライブインその頂上部から下り道になる。車で走って 15 分ぐらいすると平地が広がった地区になる。左側の山頂に城が見える、この地区が周匝(すさい)で湯郷方面から吉野川津山方面から吉井川と合流した所である。この合流地点の近くに飯岡(ゆうか)地区があつて、有名な月の輪古墳がある。山の頂上に見える城は戦国期に和気郡の天神山城主浦上宗景の家臣の佐々部氏居城の茶臼山城で天正 7 年(1579)2 月宇喜多直家に攻められ落城する(備前軍記参照の事)この周匝(すさい)の地名が書かれた木簡が平城宮跡から出土している。「備前赤坂郡周匝郷調鋏十口 天平十七年(745)十月廿日」と記されている。この土地で当時採鉄して製品としていた技術が有った訳である。

この周匝橋のある手前 1Km の信号交差点を左折して西方面に行くと黒本地区に入る。すると是里(これさと)方面の標示があり、登り坂の道路を頂上まで上がると最初にある集落が物理(もとりい)という地名で私の生まれた故郷である。この物理部落より西の久米郡方面に部落が点在している。舟木・馬場・宗成河西・河見・梶谷・延定・本村といった地名がありこれらの集落を総称した地名を是里(これさと)と称している。標高 300m ぐらいで見晴らしの良い地形があり弥生時代からの稲作が行われていた。石包丁や石斧も土器等も数多く出土している。弥生時代中期から後期に掛けての遺物が多いようである。是里の本村の塚風呂遺跡から出土した壺と器台がある。(写真参照)



私は是里の地名について渡来人の呉服部(くれはとり)織物に関係した部民が居住していたと推測しています。呉(くれ)が是(これ)に訛ったのだろうか、呉の里(くれの里)が是里(これさと)と呼ばれるようになったと思っている。

久米郡久米南町の周辺には秦氏に関係した地名や神社等がある。地名では倭文(しとり)地区にある倭文神社、錦織(にしこり)の地名にある秦氏の氏神である錦織神社がある。錦織は秦氏が伝えた絹織物である。この絹織物には桑が必要である。

倭文地区にも桑村(くわむら)という地名があり、雄略朝期(5世紀後半)諸国に桑の木を植えて絹織物が盛んに織られていたとされている。物理(もとりい)の字名に桑間(くわま)と呼ばれている地名があり、昔養蚕を行って織物を作っていたと考えられる。私も幼い頃、畑に桑の木を植えて養蚕をやっていたのを記憶している。

三、倭文神社の所在地

倭文神社の祭神は倭文織(しどりおり)の神で天羽槌雄神(あめのはつちお)建葉槌命(はきはづち)を祀っている。倭文という地名の語源は日本古来の織物の倭文織にあると言われ、読み方は「シトリ・シズリ・シドリ・シトオリ・シドリノ・シダ」とあり文字は倭文を志鳥・志津・委文・静と書くところある。倭文地区の近くの錦織地区には渡来人の秦豊永(はたほうえい)という人が居住していたと記している(倭文地区の歴史による)。

倭文神社で式内社としてある場所は鳥取県倉吉市志津、鳥取県東伯郡東郷町宮内の御冠山(おかむりやま)に在り倭文大明神と称し延喜式(河村郡の官社で中世よりの一ノ宮である。伯耆の二ノ宮は鳥取県倉吉市福庭(ふくば)に鎮座している波波伎(ははぎ)神社で主祭神は大日貴神となっている。鳥取市大字倭文字家の上、山陰の鳥取県に三座も鎮座している。また鳥取県米子市宗像に式内社の宗形神社がある。祭神は宗像の三女神である。

四、是里の宗形神社と周辺の古社

宗形神社は延喜式内社である。延喜式は醍醐天皇の命により延喜 5 年(905)に編纂に着手して延長 5 年(927)に全 50 巻として完成したとされ、式内社は延喜式の神名帳に挙げられている神社のことで国家からの奉幣(ほうへい)を受けることの規定された神社であるとしている。宗形神社は赤磐市是里字大宮山に鎮座している。昔は大宮山は、巻ノ宗(まきのむね)と呼ばれ祭神は宗像三女神で市杵島姫神・田心姫神・多紀津姫神であり三女神は天照大神と須佐之男命との誓約(うけい)によって生まれた神々である。神階は従四位上で御祭には七十五膳・七十五樽の献上の儀式がされている。私の子供の頃には盛大に行われていた。宗形神社棟札で古いもので和気郡天神山の城主の浦上遠江守宗景が永禄 5 年(1562)8 月 16 日に大願主として社殿を再建立している。江戸時代の貞享 4 年(1687)備前藩主の池田忠雄が米十石を寄進して修復している。宗形神社の後方には掘り鉢型をした穴が点在している。昔に採鉄をした場所ではないかとも伝えられている。穴の大きさは直径数十メートル深さ 5m ぐらい有ると思う。子供の頃その穴の底部に下りて遊んだことがあり、キラキラと光る鉱物のような石があった記憶がある。宗形神社の近くに地名で梶谷(かじや)宗成(むねなる)物理(もとりい)水取部・母止理部と水と関係した部民と、地名があり採鉄につながりのある遺跡とも思われている。久米郡と是里地域の境界線ともなる神ノ峰(こうのみね)y 山がある。標高 517m 宗形神社から北の方角である。ここに古社が三座ある。是里字神ノ峰に神峰神社があり祭神は大汝貴命、次に字神ノ峰に神峰伊勢神社、祭神は天照大神と豊受姫命、つぎに是里字剣山(つるぎやま)に

剣抜神社(つるぎぬき)が有って南朝の年号の興国 4 年(1343)の備前国神明帳には備前国式内外古社 128 社の一社に挙げられている。祭神は素盞鳴命である。この小さな是里の地に式内社宗形神社と合わせて四社も古社が鎮座している場所は珍しいと思っています。県下の式内社の宗形神社は(旧御津郡一宮町)現在の岡山市大窪に鎮座していて、祭神は宗像の三女神です。



宗形神社 鳥居

五、布都魂神社について

布都魂神社は石上字風呂ノ谷に鎮座している。日本書紀および延喜式神名帳に見える古社で祭神は素盞鳴命で出雲神話の中で有名な素盞鳴命の「ヤマタノオロチ」退治に関する伝承で素盞鳴命が大蛇を斬った「蛇韓鋤之劍」(おろちのからすきのつるぎ)が吉備神部(きびのかむものを)のもとにあるとの伝承がある。石上神宮と記す場合は大和朝廷の武器庫の管理をしていた現在の天理市布留に鎮座する石上神宮を言う。石上部(いそのかみべ)は大和国山辺郡石上郷より起こる。古事記に磯上と有りこの地に石上神宮が鎮座し物部氏の氏神布留の御霊剣を御霊代とする。備前国邑久郡に石上郷がある。赤磐市の布都魂神社の神主は物部氏と称しているが以前は野村氏を称していたのですが延宝 7 年(1679)に備前藩主の池田綱政の命により物部氏を称している。

六、物理(もとり)の地名について

岡山の地名で物理と呼ばれている地名は 2 箇所、旧吉井町(是里地区)と旧瀬戸町の坂根地区に昔物理保とよばれていた、中世には物理城というのが有って物理貞茂という人物が居たと言われる。旧吉井町は是里字物理とよんでいる。「続日本記」には物理郷神護景雲年中(767～769)に母止理部氏(もとりべし)等の記録があつて、母止理部とは大化以前の水取部(もひとりべ)という品部(もとべ)で中央へ出仕する伴(とも)の費用を負担する農民集団としている。姓氏録によると水取連「神饒速命六世孫伊香我色雄命之後

裔」とあり物部系である。

8 世紀になると中央では和気清麻呂の姉の広虫等が称徳天皇(女帝)から信任を受けて活躍している。和気氏と秦氏は京都葛野郡(かどの)加茂県主(かもあがたぬし)の関係があつて加茂県主は葛野郡の氷室(ひむろ)に奉仕し水取連(もひとりのむらじ)を掌握していたと見られる。和気清麻呂(平野邦雄著)略年譜254頁の条に神護景雲3年(769)6月の条に「藤野郡人母止理部奈波 赤坂人少初位家部(やかべ)大水 美作国勝田郡人従八位上家部 国持等六人石野連ヲ賜ル」と見える。その当時部(べ)から連(むらじ)への姓(かばね)の変更は氏族にとっては社会的にも地位の上昇を意味するものであろうと思う。

母止理部や家部(やかべ)の部民は職業的な分野の中で和気氏一族との関係を保ちながらの交流が成り立っていたのだと私なりに感じられる。石野連の姓を賜った部民の中には、採鉄をしたり養蚕をして織物や土木関係の仕事に従事した人々の営みが有ってその地域の文化や伝統を伝えてくれた先祖の恩恵を受けて現在の自分がある。お盆や彼岸には必ず先祖の墓に参る私も故郷を離れて四十数年の月日が流れてしまった。故郷に帰ったおり土地の風景を眺めながら幼い頃走って遊んだ場所や田畑には、今は雑木が繁り昔の姿は見えなくなっている。しかし今回は「ふるさとの地名や由来について」また神社等に関して私なりに諸文献を参考に纏めてみた。地名の中からふるさとの姿が見えてきた。

参考文献 赤磐市郡誌(全) 瀬戸町誌 久米郡誌 倭文の歴史
地名辞典 姓氏大辞典